

芸術と芸術療法の融合に対する認識の解明： テキストマイニングを用いた定量分析

青木 滉一郎[†] 伊集院 清一[†] 加藤 千恵子[†] 寺沢 英理子 保高 一仁

吉沼 智[†] 後藤 芙未子[†]

東洋大学総合情報学部[†] 多摩美術大学美術学部[†]

1. 序論

絵画や造形、音楽、詩歌などの芸術活動を通じた心理療法として、「芸術療法」が知られている。わが国では、精神科医や臨床心理士などの臨床家を中心に芸術療法が用いられ、心理療法の一分野として発展を遂げてきた。その半面、芸術活動の担い手である芸術家の視点を同分野に取り入れ、芸術と芸術療法の融合を図ることにより、さらなる発展が期待されているという現状もある。そこで、本研究では、芸術家や臨床家を対象に質問紙調査を実施し、自由記述回答について定量的な分析を行うことで、各分野の専門家が芸術・芸術療法と、その融合に対して抱く認識の特徴を明らかにする。

2. 方法

調査対象者は、2016年11月と2017年11月に美術大学のキャンパスで開催されたシンポジウムの参加者であり、合計86名から回答を得た。質問項目は、回答者の属性（年齢、性別、職業）に関する項目と、芸術および芸術療法に対する考え方を問う選択形式の質問（9項目）、自由記述形式の質問（4項目）とした。本研究では、自由記述形式の質問①～④（表1）に対する回答を分析の対象とし、無回答の質問紙を除いた有効回答数は59件（男性16名、女性43名）であった。

表1 自由記述形式の質問項目

| | |
|-----|--|
| 質問① | 美術大学、芸術大学等で“芸術療法”を専門に学ぶことについてどう思いますか？ |
| 質問② | 芸術活動をしている人に知っておいて欲しい“芸術療法”に関する事柄は何ですか？ |
| 質問③ | 芸術療法をしている人に知っておいて欲しい“芸術”に関する事柄は何ですか？ |
| 質問④ | シンポジウムに参加してのご感想、ご意見等があれば、自由に記述してください |

質問①～④に対する自由記述回答をテキストデータ化し、Tiny Text Miner (TTM) [1] による形態素解析を実施した。テキストデータは、質問項目別に分けて形態素解析を行い、質問①

～④への回答に含まれる形態素のうち、名詞、動詞、形容詞を抽出した。得られた形態素の中で、特に重要と思われる語をキーワードとして選定し、その内容に応じて後述する3カテゴリーへの分類を行った。

回答者の「職業（芸術家、臨床家、教員・講師、学生）」および「質問項目（質問①～④）」、キーワードの「カテゴリー」の間で、キーワードの出現頻度についてクロス集計を行い、カイ二乗検定および残差分析を実施した。

3. 結果および考察

形態素解析により得られたキーワードのカテゴリー分類を行い、「芸術的視点」、「臨床的視点」、「肯定的評価」の3カテゴリーが抽出された（表2）。質問①～④の回答に含まれるキーワードは、下記の3カテゴリーのいずれかに分類された。

表2 抽出されたカテゴリー

| カテゴリー | 該当するキーワード |
|-------|----------------------------------|
| 芸術的視点 | “芸術”、“美術”、“芸術家”、“評価”、“展示”など |
| 臨床的視点 | “芸術療法”、“臨床”、“治療”、“医学”、“病気”など |
| 肯定的評価 | “必要”、“興味深い”、“面白い”、“感動”、“素晴らしい”など |

いずれの質問への回答にも、作品の芸術性やその評価などにかかわる芸術的側面（芸術的視点）と、創作活動を通じた疾患の治療など臨床的側面（臨床的視点）からの記述が含まれていることがわかる。また、芸術と芸術療法の融合そのものや、融合に向けた取り組み（シンポジウム開催など）については、興味・関心や評価を示す声が多く挙げられた（肯定的評価）。

回答者の「職業」と「カテゴリー」（表3）、「職業」と「質問項目」（表4）、「質問項目」と「カテゴリー」との間で、キーワードの出現頻度についてクロス集計を行った結果を以下に示す（表5）。

カイ二乗検定により、回答中のキーワードが各カテゴリーに分類された割合を職業別に比較したところ、有意差はみられなかった（表3）。

表3 キーワードの頻度（職業×カテゴリー）

| カテゴリー | 職業 | | | |
|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 芸術家 | 臨床家 | 教員・講師 | 学生 |
| 芸術的視点 | 30 37.0% | 61 36.7% | 12 32.4% | 16 41.0% |
| 調整済み残差 | 0.04 | -0.04 | -0.59 | 0.58 |
| 臨床的視点 | 33 40.7% | 69 41.6% | 18 48.6% | 14 35.9% |
| 調整済み残差 | -0.16 | 0.03 | 0.94 | -0.76 |
| 肯定的評価 | 18 22.2% | 36 21.7% | 7 18.9% | 9 23.1% |
| 調整済み残差 | 0.14 | 0.01 | -0.43 | 0.23 |

*: p<.05, **: p<.01

表4 キーワードの頻度（職業×質問項目）

| 質問項目 | 職業 | | | |
|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 芸術家 | 臨床家 | 教員・講師 | 学生 |
| 質問① | 36 44.4% | 56 33.7% | 15 40.5% | 28 71.8% |
| 調整済み残差 | 0.56 | -3.02** | -0.16 | 4.05** |
| 質問② | 9 11.1% | 35 21.1% | 8 21.6% | 2 5.1% |
| 調整済み残差 | -1.56 | 2.16* | 0.85 | -2.07* |
| 質問③ | 15 18.5% | 13 7.8% | 13 35.1% | 2 5.1% |
| 調整済み残差 | 1.59 | -2.98** | 4.15** | -1.60 |
| 質問④ | 21 25.9% | 62 37.3% | 1 2.7% | 7 17.9% |
| 調整済み残差 | -0.52 | 3.77** | -3.66** | -1.51 |

*: p<.05, **: p<.01

表5 キーワードの頻度（質問項目×カテゴリー）

| カテゴリー | 質問項目 | | | |
|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 質問① | 質問② | 質問③ | 質問④ |
| 芸術的視点 | 44 32.6% | 14 25.9% | 27 62.8% | 34 37.4% |
| 調整済み残差 | -1.34 | -1.82 | 3.79** | 0.12 |
| 臨床的視点 | 64 47.4% | 31 57.4% | 11 25.6% | 28 30.8% |
| 調整済み残差 | 1.83 | 2.60** | -2.27* | -2.45* |
| 肯定的評価 | 27 20.0% | 9 16.7% | 5 11.6% | 29 31.9% |
| 調整済み残差 | -0.62 | -0.98 | -1.72 | 2.79** |

*: p<.05, **: p<.01

質問①～④への回答におけるキーワードの出現割合を比較したところ、有意差がみられた（p<.01）（表4）。調整済み残差を用いた残差分析の結果、臨床家は質問①（p<.01）および質問③（p<.01）の回答中のキーワードが有意に少なく、質問②（p<.05）および質問④（p<.01）の回答中のキーワードが有意に多かった。教員・講師は質問③（p<.01）の回答中のキーワードが有意に多く、質問④（p<.01）の回答中のキーワードが有意に少なかった。学生は質問①（p<.01）の回答中のキーワードが有意に多く、質問②（p<.05）の回答中のキーワードが有意に少なかった。

回答中のキーワードが各カテゴリーに分類された割合を質問項目別に比較したところ、有意差がみられた（p<.01）。残差分析の結果、質問②（p<.01）の回答中では臨床的視点、質問③（p<.01）の回答中では芸術的視点、質問④（p<.01）の回答中では肯定的評価に関わるキーワードが有意に多く、質問③（p<.05）および質問④（p<.05）の回答中では、臨床的視点に関わるキーワードが有意に少なかった。

職業の違いに関わらず、回答者の記述には、芸術・臨床の双方の視点に立つ言及がみられた。また、質問項目別にみると、臨床家は質問②、教員・講師は質問③、学生は質問①の回答に、多くのキーワードが含まれていた。臨床家や教員は各自の専門分野、学生は自身の修学に関わる質問内容に対し、キーワードへの言及が増加したと思われる。同時に、芸術療法に関する事柄を問う質問②では臨床的視点、芸術に関する事柄を問う質問③では芸術的視点のキーワードが回答中に多くみられた。

4. 結論

職業の違いに関わらず、芸術・芸術療法それぞれの視点に立ち、両者の融合について考える回答者が多かったと推察される。芸術家は、質問項目別のキーワードの偏りもみられず、芸術・芸術療法のいずれについても言及できる立場であるといえよう。また、美術大学・芸術大学で芸術療法を学ぶことについて、当事者である学生自身が関心を抱いている可能性が示唆された。本研究の成果として、様々な関係者の立場を把握した上で、融合に向けた取り組みを推進していくことが期待される。

参考文献

- [1] 松村真宏, 三浦麻子, 人文・社会科学のためのテキストマイニング, 誠信書房, 2009.

Clarification of understanding of combination between art and art therapy –Quantitative analysis by means of text mining-
† Koichiro Aoki, Faculty of Information Sciences and Arts
‡ Seiichi Ijuin, Faculty of Art and Design